

強者の戦略

2026年度 京大地理 第1問〔問題編〕

今回は2026年度の京大の第1問を解説したいと思います。文字数設定が短く、書きにくい問題もありますが、大体答えの予想がつく問題が多かったので、ほぼミスが許されない問題だったと思います。ちょっとプレッシャーをかけてしまいましたが、ぜひチャレンジしてみてください。

I 地理探究問題

東南アジアの農業と環境問題に関する以下の文を読み、次の写真と地図を見て、問(1)～(6)に答えよ。以下の文のA～Dは図中のい～に周辺のいずれかにあてはまる。解答はすべて所定の解答欄に記入せよ。字数制限のある問については、句読点も字数に含めよ。

東南アジアでは、地形などの自然条件に適した形の耕作地や農法で農業が行われてきた。Aにおける地形条件をいかした形態の耕作地は、世界遺産に登録されている。Bは三角州が広がり、従来から肥沃な土壌を持つ稲作地帯となっていたが、1960年代半ばからの緑の革命により、米の生産量が伝統的な稲作に比べて大幅に増加した。Cでは写真αが示す農業が営まれ、その農法は植生と土壌を再生させる持続性を持つものであった。しかし、社会主義体制下の土地政策や1990年代以降の市場経済の導入などにより、持続性が失われている場合もある。農産物の世界的な需要増加に伴う作物の種類や農法などの変化も、熱帯林の減少を引き起こしている。写真βは熱帯林の一種であるが、エビ養殖に適した自然条件を持つ地帯に分布していたため、エビ養殖池の拡大によって乱伐された。

Dでは1980年代以降、油やし農園が急速に拡大し、アグリビジネスの参入がみられる。油やし農園の急速な拡大は、赤道直下にあるアにおいても同様にみられ、多様性に富んだ独自の生態系が破壊されている。

強者の戦略

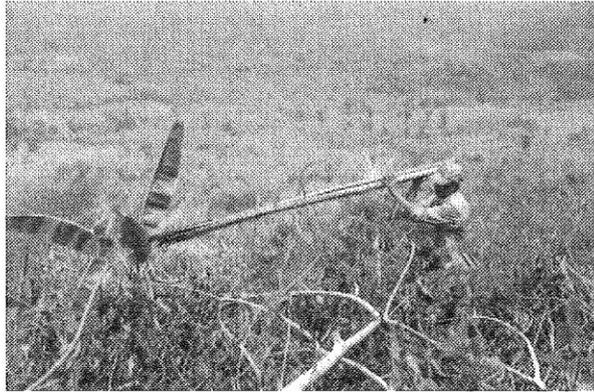


写真 α

資料：横山智(2017, 慶応義塾大学出版会)

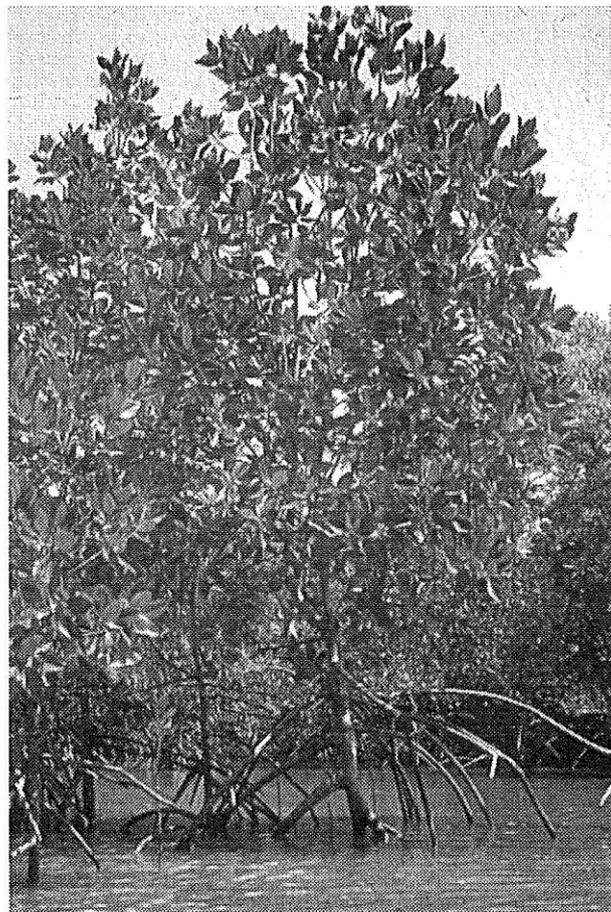
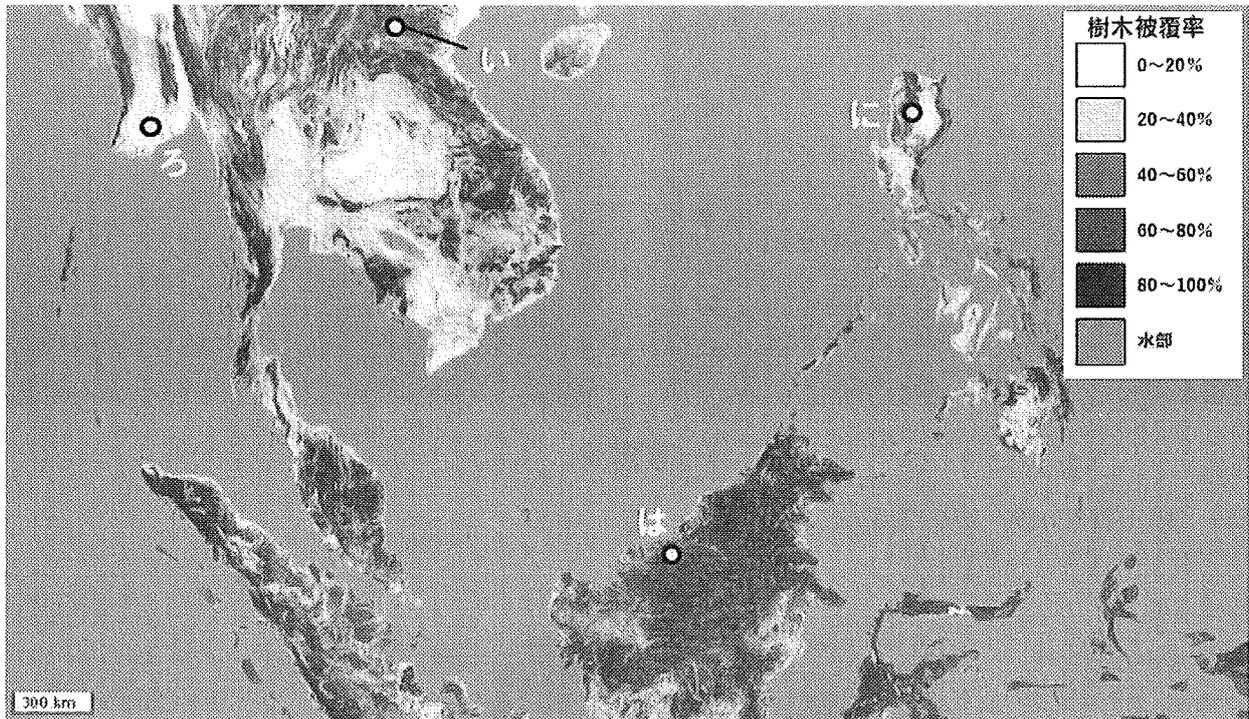


写真 β

資料：中村武久・中須賀常雄(1998, めこん)

強者の戦略



地図

資料：地理院地図 (<https://maps.gsi.go.jp/>)

問

- (1) **ア** にあてはまる東南アジアの国名を答えよ。
- (2) 下線部 **p** に関して、**A** にあてはまる場所を、図中**い**~にから1つ選んで解答欄①に記号で答えよ。また、どのような地形条件および形態かを、解答欄②に述べよ。
- (3) 下線部 **q** に関して、緑の革命を契機として農業で用いられるようになったもののなかで、フィリピンの研究所で開発され、各国・地域に広まったものを解答欄①に、天候に左右されないようにするために整備された農業インフラを解答欄②に、それぞれ答えよ。
- (4) 下線部 **r** に関して、**写真α**の農法ではどのようにして持続性が保たれていたのかを、解答欄①に40字以内で述べよ。また、**C** にあてはまる場所を、図中**い**~にから一つ選んで解答欄②に記号で答えよ。
- (5) 下線部 **s** に関して、**写真β**の熱帯林が分布する地帯には、土壌や日照・気候条件以外にもエビ養殖に適した自然条件が見られる。それはどのような自然条件かを述べよ。
- (6) 下線部 **t** に関して、ある農産物を栽培していた農園が油やし農園へと政府の政策によって大規模に転用された。その農産物とは何かを解答欄①に答えよ。また、アグリビジネスの特徴として、油やしに関わる事業において企業は何を担っているかを、解答欄②に述べよ。

強者の戦略

2026年度 京大地理 第1問 [解答解説編]

【解答】

- (1) インドネシア
- (2) ①に ②傾斜が大きい地形条件で、階段状に水田を経営する棚田の形態が見られる。
- (3) ①高収量品種 (IR-8) ②灌漑施設
- (4) ①森林の焼却後、草木灰で土壌を肥沃化し農業を行い、その後休閑して森林を再生させる。(40字) ②い
- (5) 淡水と海水が混ざる汽水域が見られる。
- (6) ①天然ゴム ②油やしの搾油場の経営、パーム油の輸送・輸出など。

【解説】

- (1) 地図上の「は」がマレーシア内にあることが分かるので、「この地域で赤道直下にある」というヒントからインドネシアと決定できます。マレーシアとインドネシアの国土がどの位置にあるかあやふやだった受験生以外はほぼ全員正解していると思われます。
- (2) ①②「地形条件をいかした形態の耕作地」から棚田→新期造山帯→フィリピン(ルソン島)→「に」とすぐに判断してください。東南アジアはインドシナ半島など、大河川が流れる地域では河川河口のデルタ地帯における稲作が盛んであり、フィリピンのルソン島やインドネシアのジャワ島など、新期造山帯に属する島嶼では、傾斜の大きな山間地を階段状の平坦地に変え、そこで稲作を行っていることは有名です。
- (3) ①緑の革命といえ、発展途上地域に高収量品種を導入することで、一定程度の食糧不足を改善することができた革命のことを指します。フィリピンの国際稲作研究所(IRRI)で開発されたIR-8という米の品種は、インドネシアの品種「Peta」と、台湾の短稈(背が低い)品種「低脚烏尖 (Dee-geo-woo-gen)」を掛け合わせて誕生しました。この品種は従来の品種よりも圧倒的に収穫量が多く、病害虫に強い稲となりました。解答としては、高収量品種と書いても、IR-8と書いても正解になると思います。
②「天候に左右されないようにする」から、この地域の天候(気候)を考えると、雨季と乾季に分かれた気候の面積が大きいことが分かります。雨季の時に多雨であったとしても、乾季の時に作物を育てるのに必要な降雨量が確保できなければ、十分な収穫量を確保できません。そこで必要になる農業インフラは「灌漑施設」となります。乾季の時でも灌漑施設から水を農地に導入できれば、ある程度の収穫量を確保でき、食糧不足改善の一助となります。では、なぜ高収量品種と灌漑施設はワンセットで語られるのでしょうか。高収量品種の最大の特徴は、大量の肥料を与えても倒れず、それをすべて「米の実」に変える力(肥料応答性)です。植物は肥料(窒素、リン酸、カリウムなど)を、水に溶けた状態(イオン)で根から吸収します。土壌が乾いてしまうと、どれだけ高価な肥料を撒いても稲はそれを吸い上げることができず、宝の持ち腐れになってしまいます。つまり、「大量の肥料」を「大量の水」で吸収することができる、これが高収量品種の良さになるので、

強者の戦略

灌漑施設が必要ということになります。

- (4) ①**写真α**がどういう写真なのか見えにくいですが、「その農法は植生と土壌を再生させる持続性をもつ」ことから、焼畑(移動式焼畑)農業が行われていることが分かります。焼畑農業自体は記述するのが難しいわけではないですが、40字で「どのようにして持続性が保たれていたのか」を述べるのは結構大変です。一応、帝国書院の『新詳地理探究』の焼畑の記述を引用します(太ゴシックは私がつけました)。

「アフリカの中南部やラテンアメリカの熱帯地域、東南アジアなどでは、森林や草原に火を入れてその灰を肥料とし、キャッサバ・陸稻・雑穀・とうもろこし・タロイも・バナナなどを栽培する焼畑農業が行われる。**伝統的な焼畑農業では、作物を変えながら数年間栽培した後、雑草の侵入や地力の低下により耕地をほかの土地に移し、長期間耕作を放棄して植生を回復させてから、再び火を入れて整地し耕作を行う。**しかし近年は、商品作物の栽培を目的として同じ作物を連続して栽培する畑への転換や有用樹の植林などにより、焼畑農業が急速にみられなくなった地域もある」

上記の太ゴシック体の部分だけで90字もかかっています。「森林や草原に火を入れてその灰を肥料にし」という部分も盛り込もうとすれば、40字では到底足りません。どの情報を削るのが最適なのか分かりづらいですが、「休耕期間」「休閒」→「植生回復」という流れが入っていれば及第点でしょう。

②「**い**」～「**に**」と**A**～**D**の組合せを決めたいと思います。**A**はさきほどの棚田の問題から「**い**」が決定しています。**D**は油やし農園が急速に拡大しているので、パーム油の生産量が多いマレーシアの「**は**」に該当します。**B**には三角州が広がっているため、エーヤワディー川デルタに位置する「**ろ**」に該当します。残る**C**がベトナムの「**い**」に該当します。「**い**」は樹木被覆率が高いので、焼畑農業が行えると判断できます。ただ、「1990年代以降の市場経済の導入」という文言が少し悩ましいですね。ベトナムのドイモイ政策の導入が1986年なので、一瞬「？」となりますが、ベトナムでは1990年代に経済制度の自由化が加速しています。

- (5) しっかり勉強していれば、「淡水と海水が混ざる汽水域」と簡単に書けたと思います。**写真β**の mangrove 林も汽水域で生育しやすい植生です。エビ養殖池と mangrove 林がともに汽水域を求めるため競合状態となり、この地域においてエビ養殖を重視するあまり、 mangrove 林の植生が失われていきました。

- (6) ①天然ゴムと答えるのは簡単だったでしょうか？マレーシアではもともと、自動車のタイヤなどの原料になる天然ゴムを栽培し、世界へ輸出する産業が盛んでしたが、1960年代頃になると、合成ゴムが世界で浸透したことによって、天然ゴムの売れ行きが悪くなりました。そして不況に陥ったマレーシアでは、ゴム依存のモノカルチャーからの脱却を考え、世界銀行やフォード財団の提言を受けながら、政府は農業多角化を模索し、その過程でゴムに栽培条件の近い油やしに行き当たりました。

強者の戦略

②まず、油やしからどのようにしてパーム油になり、世界で消費されているのかを示しておきます。パーム油のたどる道筋は、農園→収穫→搾油工場(パーム原油)→精製工場(一次精製油)→輸入→油脂メーカー→食品産業→消費者 となります。搾油工場までの工程はおおよそ手作業に頼っています。大きな木から実の塊である果房を1つ1つ手作業で刈り取り、採取された果房はある程度大きな道路沿いまで荷車や一輪車などで運ばれます。この後、道路わきに集められた果房はトラックに載せられ、搾油工場に運ばれます。このトラック輸送あたりからアグリビジネスが主に関わり始めているとすると、油やしのトラック輸送、搾油工場の経営、パーム油の輸送・輸出を解答としてよい気がします。油やしのトラック輸送があまり企業がからんでいないとすると、搾油工場の経営、パーム油の輸送・輸出でもよいと思います。まあ、アグリビジネスの定義が「農業生産だけでなく、資材供給、加工、流通、販売までを含めた農業関連の経済活動全体を指す言葉」なので(みなさんも教科書で1回は読んだ経験はあると思います)、それを念頭において「油やしの加工、流通、販売などを行っている」と書くだけでも満点がもらえるんじゃないかと思います。

参考：『アブラヤシ農園問題の研究 I グローバル編』（林田秀樹編著）

ここまで読んでいただいた皆さん、お疲れ様でした。次回は恐らく、2026年の京大第2問の解説でお会いいたしましょう。